

命の大切さを知る、身近な動物園

天王寺動物園



動物園は動物たちを見るだけでなく、環境教育の場として脚光を浴びるようになってきました。2015年に開園100周年を迎える天王寺動物園では、1994年に「ZOO21計画」が策定され、現在、展開中です。今回は「ZOO21計画」で導入された生態的展示と、天王寺動物園の人気者、アジアゾウの春子とラニー博子について紹介します。

動物たちの尊厳を守る生態的展示

世界で初めての科学的動物園は、1828年に開園したイギリスのロンドン動物園だと言われています。ロンドン動物学会の研究資料収集施設として創設されたもので、研究費用調達のために一般に公開されたと記録されています。以降、19世紀の動物園は、生きた動物を生きたまま収蔵する博物館としての性格が強く、動物を鉄鎖で囲った檻の中で見せるという展示法が取られることが多かったそうです。しかし、この展示は見にくいいため、1907年ドイツのハーゲンベック動物園で始まった、柵を無くし堀割で囲う堀(モート)式の手法が変わっていきます。その後、1970年4月に始まった環境運動アースデイをきっかけに、環境という視点から人間の暮らしを見つめ直す活動が盛んになりました。動物園でも新しい展示方法が検討・実施されるようになります。園内で動物の生息環境を再現し、動物の生態全体を見せる生態的展示という展示法が採用されたのはこの頃です。この展示法では、動物の生態系に人間が入ってゆくという感覚が得られるよう園全体を設計します。

天王寺動物園では、1994年に21世紀に向けた新しい動物園を再整備する「ZOO21計画」を策定しました。この計画において、「地域の緑のオアシスの役割」「野生動物の棲んでいる環境の再現」「希少な野生動物を殖やす」ことを目的に生態的展示の導入を決定しました。

たとえば、動物舎に近付くまでの園路幅を狭くし、蛇行させ、園路の動物舎と反対側にも植栽することで、周辺建物を見えにくくしました。動物の住む環境が再現され、進むほどにワクワク感が湧いてくる



アジアゾウの春子とラニー博子

という効果ができました。動物を見るとときも、視線が軽く見上げる位置になるよう配されています。「アフリカサバンナゾーン」の「カバ舎」では日本で初めてカバの水中展示を実現し、カバが水中で暮らす姿が見ることができるようになりました。排泄物で水が汚れても濾過設備で水の透明度を維持できるので、魚がカバの皮膚に付いた汚れを食べ、共生する様子が観察できます。また、肉食動物のライオンやブチハイエナと草食動物のキリンやシマウマなどが一緒に生息しているように見えます。希少動物を絶滅から救う「種の保存」もこれからの動物園が担う役割のひとつです。血統登録して、内外の動物園が連携して繁殖を行うネットワークを構築しています。種によって多くの赤ちゃんを生み、将来、そのペアの子孫が多くなるのを防ぐため出産を制限することもあります。

現在「ZOO21計画」の完成はまだ3分の1。大阪市の財政が厳しい中、企業スポンサーへ働きかけたり、「天王寺動物園サポーター制度」を発足させ、一般からの資金提供を呼びかけたり、ふるさと納税による基金も募集しています。

天王寺動物園の人気者 春子とラニー博子

現在、天王寺動物園には約210種900点の動物を飼育展示しています。中でも一番の人気は2頭の雌アジアゾウです。春子は1950年に大阪の貿易商から寄贈され、タイから来園しました。春子は推定年齢が62歳です。一方のラニー博子（推定41歳）は大阪万博（1970年）の時、インド政府から寄贈されました。この2頭の暮らしぶりについて飼育員歴28年の小谷信浩さんにお話を伺いました。「ゾウは神経質で賢い性格ですが、心を開くには時間がかかります」と小谷さん。春子に何とか気を許してもらえるようになるまで8年の年月がかかったそうです。

ゾウは、新米の飼育員が来ると鼻水をかけたりして、いじめるそうです。それを乗り越えなければ一人前のゾウの飼育員になれません。また、ゾウはたいへん賢くて、器用な動物でゾウ舎の据え付け物を鼻で壊した後、修理するとまた壊したりするのだとか。壊したものをそのままにしておく、自分が勝ったとの優越感を持ちもう壊さなくなるそうです。ゾウが本当に心を開いているか読めずに、親しく接すると大けがをすることになります。そのため、ゾウ舎の中に入る時は2人で入るのが鉄則なのだそうです。

ラニー博子は日本に来る前、母ゾウを目の前で殺されたという辛い経験を持っています。同居の当初、ラニー博子はまだ小さな子ゾウだったので、当時のリーダーであった春子からいじめられたのだそうです。今は立場が逆転し、ラニー博子の方が優位になりましたが、時に鼻の取り合いや耳をひっぱり合いをすることがあるので、2頭を分けて飼育しており、ゾウ舎内では柵を置いて接触を避けるようにしています。しかし、春子が体調を崩すと、ラニー博子が気を遣っている様子もあるとか。雌同士の気の張り合いが春子の長生きの秘訣になっているのかも知れません。そんな春子とラニー博子ですが、2頭ともファンサービスは心得ていて、子供らが来ると愛嬌を振りまいてくれます。

大阪の都心部にあり、多くの人が思い出を持っている天王寺動物園。21世紀に入り、家族のリクリエーションや気持ちのリフレッシュ、動物の生態や地球環境の学びの場など、楽しみ方が広がっています。春の行楽に訪れてみてはいかがでしょうか。

天王寺動物園

大阪市天王寺区茶臼山1-108

TEL 06・6771・8401

<http://www.jazga.or.jp/tennoji/>

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞